
夜想曲【月光】

住ノ江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜想曲【月光】

【NZコード】

N5195D

【作者名】

住ノ江

【あらすじ】

若い女性ばかりが狙われ、遺体からは骨や髪が持ち去られる。猟奇殺人犯の存在に世間はおびえていた。

(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひいたします。

『……次のニュースです。本日未明、 市の路上で若い女性の遺体が発見されました。警察は連續殺人事件として犯人を捜索中です……』

マスコミの報道を見ながら警察は頭を悩ませていた。突然現れたその殺人鬼はこの数日世間を騒がせている。

「これで九人目か……」

誰ともなくつぶやく。警察内部には嫌な空気が立ちこめていた。「えー、被害者は市内にすむ二十代のO君です。遺体は頭部が切断されており、死因は失血死。頭部は近くの草むらから見つかり、髪が切り取られていました」

部下のひとりが報告した。何人かがふうとため息をこぼす。

「何人殺せば気が済むんだ！」

「落ち着け、俺達が逮捕すればいいだけの話だ」

「目撃情報もなし、証拠もなし、犯人像も逃走経路もわからないのにどうやって捕まえるというんだ」

刑事達が言い争いを始める。

「全く、トチ狂つたやつが世の中にはいるもんだ」
ひとりがぽつりとつぶやく。

「一人目から四人目までは頭蓋骨を、五人目から七人目までは大腿骨や上腕骨を、八、九人目からは髪を、それぞれ持ち去るなんてな」
その世にも恐ろしい光景を思い浮かべたのか、署内の空気はまた重くなつた。

被害者は全員二十代の若い女性である。共通点は市内に勤務、在住している点のみで、容姿その他はほぼ関連がない。無差別殺人といつても差し支えないだろう。

殺害の手口は身体の一部を切除されていたり、刃物で切りつけら

れていたりと様々だつた。刃物で切りつけられた被害者には犯人と争つた跡があつた。

「何の目的でこんなことを……」

そのとき、新米の刑事が余計な口を挟んだ。

「持ち去つた骨でなんか造つたりしてるんすかねえ？」

「…………」

常人に理解できそうにないその光景を誰もが思い浮かべる。ひとりが顔を青くしてトイレに向かつた。

ベテラン刑事がさつと立ち上がり、皆を励ますように力強く言つた。

「とにかく、早く犯人を捕まえよう。犯人の次の狙いもわかつてきましたしな」

「そうだな。次のターゲットはおそらく、ハ、九人目と同じ黒髪のロングヘアーレの女性だろう」

同僚が活氣づいて話し合いを進める中、高峰はひとりぼんやりとしていた。言葉が全く頭に入つてこない。

高峰の一人娘の彩子も、黒髪のロングヘアーレだつたからだ。

翌日。

食べる気の起こらない朝食を前に、高峰は娘の向かいに腰かけた。大学三年生になる娘は髪の手入れに気を使つてゐるようで、流れるような黒髪は今日も健在であつた。娘の自慢のストレートヘアーレが今は忌々しく見えた。

「彩子、知つてると思つが最近物騒な事件が多いだろ。帰り道ちゃんと気をつけるよ」

「わかつてゐわよ、お父さん。刑事の娘なんだから心配いじ無用よ」

「あんなあ。ふざけて言つてるんじゃないんだ、本当に元気をつけてくれよ」

軽い口調の彩子に、高峰は心配顔で言つた。彩子はにこにこしてゐたが、ふと真面目な顔になつた。

「……お父さん、お願いがあるの。私を匿にして犯人を逮捕してほしい」
「な、何を言つているんだ彩子！ そんなの駄目に決まってるだろう」

彩子はにこりと口角を上げた。その笑みはひきつっていた。恐怖を隠しきれていないというようだ。

「ずっとビクビクして過ごすなら、一瞬ビクッとし、あとはすつきりしたほうがいいじゃない？」

彩子は恐怖しているのだ。怖くて仕方がないのだろう。自ら不安の種を摘み取つてしまいたいほどだ。

高峰は彩子の決意に戸惑つたが、同じく決意を固め言つた。

「わかった。やつの犯行の多い土曜の夜に決行しよう」

土曜の夜。

彩子は人気のない道を歩いていた。殺人鬼が現れてから今日でちょうど一ヶ月になる。満月の夜だつた。

携帯を握りしめ、周りに注意する。秋だというのに手が汗ばんでいた。彩子はふと父の言葉を思い出す。

『犯人に会つたらすぐ通話ボタンを押せ。下手に騒ぐな。抵抗するな。そうすれば余計な怪我をしなくてすむ。髪を切られそうになつても、耐えるんだ。すぐ駆けつけるから』

高峰は彩子と距離を保ちながら後をつけっていた。同じく携帯を握りしめている。

おぼつかない足取りで彩子は前方を歩いている。カツラをかぶせた婦警にやらせるべきだったか、と高峰は後悔していた。

彩子は十字路を左折した。ルートは事前に決めてある。見失うなんてことはない。

その瞬間、手の中の携帯が震えだした。

「彩子！」

そう叫びそうになる自分を抑え、現場に駆け出す。曲がり角まで

あと十メートル。受話口からかすかに声がする。

『……お嬢さん、その美しい髪の毛を僕にください……』

身の毛がよだつた。あと三メートル。受話器を通さずとも音が聞こえる。どさりと人が倒れる音だつた。

角を曲がると一人の人影が見えた。一人は倒れている彩子。

「……っ！ 手を挙げろ！ 警察だ！」

高峰は彩子が心配で仕方なかつたが、傍らに立つもう一人の人影に銃を向けた。まだ少年のように見えるその人影は、銃を見てたじろいだように彩子の側を離れた。

道路には日本製に見えないナイフが落ちていて、彩子の黒い髪が散らばつている。

高峰は少年を見る。十五歳ほどだろうか。月明かりが逆光となりはつきりとは見えないが、少し癖のある日本人離れした金髪に、頼りなさげな細い身体。こんな少年があの猟奇殺人犯なのか、と高峰は愕然とする。

少年は手に妙なものを持っていた。いびつな小さめのギターのよう見える。もう片方の手には弦楽器の弓のようなもの。そうか、あれはヴァイオリンか と高峰は思いあたつた。

そのヴァイオリンはカルメラのような飴色ではなく、くすんだ白だった。黒い弦がぴんと張られている。そう、それは人体の色だつた。

「下がれ」

冷静に努めて高峰は低い声で命令した。少年は素直に従う。

見たところ、おぞましいヴァイオリン以外には凶器を持っていない。よく見ると黒い長い糸……おそらく彩子の髪、も持つているようだ。

威圧して殺人鬼を彩子から遠ざけ、代わりに高峰は彩子に近づいた。犯人確保が優先だが、つい彩子の様子が気になり目線を殺人鬼から外す。

彩子は美しい髪を切られているものの外傷はなく、気絶している

ようだつた。

前に目線を戻すと、殺人鬼は片手にヴァイオリンを持ったまま、器用に彩子の髪を弓に括り付けていた。高峰が驚いていると、楽器が完成したのか、殺人鬼はにこりと高峰に笑いかけた。高峰はさらに背筋が凍る。その笑顔は狂人のそれではなく、純粋な少年のものだった。

満月を後ろに従えるように立ち、少年は歌つように語り出した。
「今宵、この国で一番の楽器が完成致しました。その音色をどうぞご堪能ください」

高峰に一礼して少年は楽器を構える。滑るように弾き出した。
高峰は思わず感心した。音合わせもしていらないのに、いびつな楽器はちゃんとした曲を奏でていた。

小川が流れるように纖細だが、時折外れる音に違和感を覚える。
そしてだんだんと音程が狂いはじめ、リズムも滅茶苦茶になる。小川は滝へと続き、滝の下には醜い魔物が潜んでいた。

「あああああああああ！」

痛い。頭が痛い。割れるように痛い。痛い。

耐えきれなくなつた高峰は、銃を取り落としその場にうずくまつた。すぐ近くに彩子の顔が見える。青い顔をした彩子にはこの狂つた音は聞こえていないようだつた。

少年が勢よく腕を振り上げると、余韻を残して音は霧散した。
少年は少し眉をひそめてつぶやく。

「だめだなあ、響きがよくないしあまり鳴らないや。ニッポンは豊かな国だからいいものが造れると思つたのに」

天使のような風貌をした少年の悪魔のようなつぶやきは、誰にも聞かれるることはなかつた。

倒れた二人を置き去りにして少年は去つていつた。

後日、ベテラン刑事は髪の短くなつた彩子と向かい合つていた。
「お腹を殴られて気が遠くなつて……。気づいたら父が私を揺さぶ

つて起こしていました

彩子は言つた。殺人鬼は少年のような風貌で、白い楽器のようなものを持っていたと。ベテラン刑事はそれが被害者の骨と髪で造られたものだと予測がついた。

「高峰……、お父さんは、なんて？」

「大丈夫か、あの曲を聞いてないだらうなつて、そう言いました」付近の住宅地に聞き込みしたが、深夜にそんな曲はおろか叫び声を聞いた人すらいなかつた。ベテラン刑事は考え込むときの癖で顎をさすつた。

「あの……父は、どこへ行つたのでしょうか？」

顔色の悪い彩子はすがるように尋ねた。刑事はわからない、と首を横に振る。

彩子から離れ、部屋の隅に移動した。メモをとつていた空氣の読めない新米の刑事が、神妙な顔をして言う。

「高峰先輩……頭イカレちまつたんすかね？」

ベテラン刑事は眉間に皺を寄せた。彩子を振り返ると窓の外をぼうつと見ていて、今の失言は聞こえていないようだつた。

彩子を見送つたあと署に「ゴツッ」という鈍い音が響き渡つたのは、言つまでもない。

高峰は失踪した。空港で田撃されたのを最後に、行方がつかめなくなつた。

田撃者の話によると、高峰は虚ろな顔であるすると歩き、大層気味が悪かつたらしい。

そしてぶつぶつとひとりでつぶやいていたという。

「あれじゃいけない。もつといい、ソザイを。次は、そう。あの経済大国なんかどうだらう」

(後書き)

一月十二日、加筆修正しようと断念、誤字のみ修正致しました。

中国などでは馬や鳥の骨を使つた楽器が実際にあるようです。管楽器のホルンも語源は「角笛」ですし、昔は生物由来の材料で楽器を作つていたのでしょうか。だからと云つてこの話は飛躍しちゃですが。

お読みくださつてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5195d/>

夜想曲【月光】

2010年10月8日15時59分発行